

論文要旨

「家族もの」から「恋愛もの」へのシフトはいかにして起きたか - 『りぼん』『なかよし』を題材として -

現代の少女マンガは一般的に、取り上げる題材の多くが「恋愛もの」であるというのが特徴である。しかし、少女マンガの歴史をさかのぼると、最初から「恋愛もの」があったという訳ではないということがわかる。先行研究においてはそのような「恋愛」を主軸とした物語が「少女マンガ」作品の中で主題化するの、1960年代後半から1970年代頃とされている。そして、ており、それ以前に取り扱われる題材は「家族もの」と呼ばれる、家族を中心とした物語が多かった(米沢[1980]2007,藤本[1998]2008)とされる。

先行研究では、「家族もの」が主流であった時期に、少女マンガが「恋愛もの」を取り入れていくきっかけとなった作品がいくつか挙げられ、たとえば水野英子『星のたてごと』(1960年)や西谷祥子『マリイ・ルウ』(1965年)など、当時としては活気的であったラブロマンスを描いた事で、象徴的に影響を受けて少女マンガ全体が変化していったとされている。しかし、それらが語られる際には、前述のように、作品名や作家論で語られる事が多く、雑誌単位でのテーマの変遷の過程を総括的に追った研究はほとんどない。たとえそういった象徴的な作品や作者が後世に影響を与えたことが事実だとしても、それが具体的にはどのように他の作家や雑誌に影響を及ぼしていったのか、そして具体的にはどのような過程を経て、その時期の少女マンガに「家族もの」から「恋愛もの」という主題の変化が起こったのかを明らかにした研究はほとんどないのである。また、雑誌ごとで、ターゲットとする読者層の年齢が異なるため、その変化の過程は雑誌媒体により違っていた可能性が高い。たとえば対象年齢層の高い雑誌では恋愛という主題が比較的早くから取り扱われるようになったとしても、低年齢層向けの雑誌では、恋愛という主題を扱うまで時間がかかるというのはじゅうぶん考えられることである。

逆に言えば、恋愛を取り扱いやすいであろう高年齢層向けの雑誌よりも、あえて低年齢層に向けた雑誌媒体に掲載されているマンガでまで恋愛が取り扱われるようになった時期が確定できれば、それは同時に、恋愛という一つの大きなテーマが、少女マンガ全体の中で重要視されるようになった時期を確定することになるのではないかと考えられる。

本研究では、そうした考え方に基づき、比較的low年齢層向けの少女雑誌『りぼん』と『なかよし』の中のマンガにおいて、その主題が「家族もの」から「恋愛もの」へと主題が変化していく具体的な過程を追い、主題の交替の時期を明らかにする。

また、『りぼん』と『なかよし』は、現在でも刊行されている雑誌の中では最も古い月刊少女(マンガ)誌であるが、両誌ともに幼年誌とされ、低い年齢の読者層をターゲットにしている。先に述べた通り、読者の年齢層が低いとされるこの2誌にも恋愛が登場するということは、少女マンガの中に恋愛というテーマが十分に浸透したと考えることが出来る。

また、『りぼん』と『なかよし』を調査対象として選んだのにはもう一つ理由がある。1960年代¹、この2誌には、母親向けの情報ページが毎号掲載されていた。それは、現在の少女マンガ誌ではみられないものである。そして、それは恋愛ものへのシフトが起きたとされるちょうどその頃、1969年9月号で、両誌とも消滅する。このページの存在を考えたときに、それまで、幼年誌ということで、母親が子供の読む物を管理していた可能性があるのではないかという推測ができる。そして、それが消滅したことは、子供の読み物への親の管理が外れたこと、子供が子供の意志で、自分のお小遣いで（マンガ）雑誌を買い始めたことと、少女（マンガ）誌の主題が「家族もの」から「恋愛もの」にシフトチェンジしていくこととの間には、なんらかの関係があるのではないか。「母親ページ」の消滅と、少女（マンガ）誌の主題が「家族もの」から「恋愛もの」にシフトチェンジしていくこととの間にはどのような関係が認められるのか。それを探ることを、本研究のもう一つの目的としたい。

これらの具体的な過程を明らかにすることは、現在の少女マンガが、どのような過程を経て出来上がってきたのかの一端を明らかにすることであり、これまでに先行研究で語られてきた「60年代後半の転換点」の具体的な内実を明らかにすることである。

本論文では、まず、前述の母親ページに関する考察を行った。もともと、『りぼん』『なかよし』は、絵物語や小説、特集などの読み物、そしてマンガという要素で構成されていたが、1960年代は徐々に雑誌の中でマンガの割合が増加していく状況にあった。母親側は、1950年代にはじまった悪書追放運動などの影響で、少女雑誌にマンガが増加していく状況を危惧しており、漫画の増加に対して批判的な意見を寄せている。特に『りぼん』ではそういった投書に直接編集長が答えることで、マンガを取り扱う雑誌としての態度を示し、積極的に批判的な意見も載せていた。

しかし、1969年9月号で両誌は母親ページを終了する。その後はマンガの割合も大幅に増加し、1971年の『りぼん』ではすでに90パーセントを超えている号もあり、すでに、マンガ雑誌の機能を果たしているといっている状況になる。その時期はちょうど子供たちにお小遣制が浸透した時期とも重なり、母の監視をのがれ、自分たちで雑誌を買うようになっていたということが想像される。母親ページの消滅は、一般雑誌からマンガ雑誌へ変わっていくなかで母の監視を逃れた少女雑誌にとって象徴的な現象であったといえるのだ。

第3章からは、「家族もの」が多いとされていたとされる実態を検証し、その要素の消滅について検討していった。まずは第3章の巻頭カラーで人気作品の変遷を追う事で、「家族もの」を主題に扱う作品が、1969年から1970年にかけて、なくなっていくことがわかった。そして、第4章では連載作品での変化を追い、同様の変化が起きていたことが確認された。「母もの」や「家族もの」から、家族の物語が語られない作品が増えていき、1969年から1970年には家族もの中心の物語がなくなっていったのは、母親ページ消滅とほぼ同じタイミングであった。1969年から1970年にかけては、「母親ページ」がなくなった頃からマンガの割合が増えるというメディアとしての変化だけではなく、明らかにコンテンツ自体

¹ 『なかよし』では1961年4月号から、『りぼん』では国会図書館で確認できた最も古い号である1956年4月号から掲載されている。

のテーマの変化があり、その2点を関連づけることができる。

そして、「家族もの」要素のうすまりとともに、少女マンガは徐々に恋愛描写の取り入れを行っていく。本論では、「各作品の恋愛要素抽出表」を用い、どのようにして恋愛描写や恋愛要素がそれぞれの雑誌に組み入れられてきたのかを検証した。

初期は、主人公の恋愛を描くのではなく、家族や周りにいる人物の恋愛が描かれている状況であり、連載作品では特にその傾向が顕著に見られた。

そして、主人公の恋愛に関しては、恋愛要素のある作品は読み切り作品の中で描かれてから、連載作品にも持ち込まれるといった特徴がみられたが、連載作品で主人公の恋愛が取り扱われるようになるのは1969年以降からである。

1969年になると、すでにマンガの割合は7割程度になっていた。両誌はマンガ雑誌と呼んでもおかしくない状況にあり、マンガの増加に伴い、新しい作家もデビューしている。そして、そういった新人が多く/read切作品を掲載する事で、恋愛への主題化に拍車をかけた。

特に、1969年後期には恋愛描写の多い作品が増加する。両誌共に1969年9月号で起きた母親ページの消滅は、少女マンガが「恋愛もの」へシフトしていく過程におきた象徴的な出来事だった。母の監視の目から逃れた少女マンガは、まるで母の目から解放されたかの様にキスをし、肉体をもち、セックスにまで急速にその興味をひろげていったのだった。

つまり、本論の研究結果をまとめると、『りぼん』、『なかよし』がマンガ中心になり、母の監視の目が消え、主題が「家族もの」から「恋愛もの」へシフトするという状況は両誌とも共通の時期に起っており、それはすべて1969年から1970年に起きていたということが明らかになったといえる。